「遊び」を通して子どもに関わるということ

－ 冒険遊び場とプレーリーダー －

嶋　村　仁　志

はじめに

教職課程の公開講演会で，冒険遊び場の紹介，遊びの大切さと自由な遊び場があることの意味，なぜ大人が関わるのか，子どもと関わる他の職業と共通して大切にしたいことをお話させていただいたと思います。講演会での話を付け加えたり，削ったりしながら，まとめました。少しでも多くの方が，子どもの遊び環境や子どもの遊びに関わることに興味を持っていただけたらと思います。

冒険遊び場とプレーリーダー

私は，プレーリーダーという職業を仕事にしています。イギリスではプレーワーカー，ドイツ，スイス，北欧ではペタゴーと呼ばれている職業です。この職業は，社会福祉や保育，ユースワークという分野をまたいでいますが，「遊び」を通して数多くの人が子どもと職業として関わっています。私はその中でも「冒険遊び場（またはプレーパーク）」と呼ばれる遊び場で働いています。

当初，冒険遊び場は「廃材遊び場」と呼ばれていた。大人が用意した完成品を配置して子どもを遊ばせるのではなく，廃材置き場のように廃材や自然の素材を使って，子どもが創意工夫と主体性を持って自分たちで遊び場を作っていくことができるような遊び場で，子どもはそのような場の方がいきい

きと遊ぶのではないかという都市計画家ソーレンセンの発想で生まれた。こうした遊び場は，デンマークの首都コペンハーゲンの郊外にあるエンドラップという場所に初めて作られた。その後，1970年代にかけてイギリス，ドイツ，スイスなどを中心にヨーロッパ中に広がっている。後に廃材遊び場は，「冒険遊び場」「建築遊び場」「ロビンソン遊び場」と各地で名前を変え（一時期は1000箇所近くあったと言われる），現在に至る。日本では，1975年に初めて現在の形の冒険遊び場が試験的に始まった。1979年に世田谷区で羽根木プレーパークが開園して以来，約190箇所で冒険遊び場づくりの取り組みが行われている。

冒険遊び場には，プレーリーダーと呼ばれる人が常駐し，子どもが「やってみたい」と思うことを見守りながら，思い切り遊べる場づくりをする仕事としている。デンマークで初めて生まれた「エンドラップ廃材遊び場」でプレーリーダーをしていたジョン・ベルテルセンは，次のように書いている。

> 冒険遊び場では，リーダーはいわば外から働きかけるオルガナイザーとは同じように考えられることはほとんどない。むしろ，私の役目は遊び場の実際的な体制のなかで生じる役目である。そしてその遊び場で私は子どもたちの計画を実現させるためのあらゆる機会をつくる立場にいるのである。主導権は子どもたち自身にあるべきであり，必要な素材が手に入れば，それらが子どもたちに遊びのインスピレーションを与える。私は子どもたちに何かを教えることはできないし，事実教える気持ちもない。私は子どもたちの創造的遊びと作業を指示する能力の発達を助けることができる。私が最も重要後考えていることは，リーダーがあまりかしこく見えないようにすべきで，子どもたちと同じ実験的な段階にとどまっているべきだということである。こうして主導権はおおいに子どもら自身にまかされ，そうすることで彼らの幻想的な世界にしかめつらしい押し付けをしないようにできるのである。
> （「新しい遊び場」アービット・ベンソン著・大村虔一・璋子訳・鹿島出版会）

遊び場は，子どもにとっての工房

冒険遊び場の大きな特徴は，子どもが自ら遊び場を変化させていくことができることにある。土の地面とシャベルがあれば，穴を掘ることができる。それが落とし穴にもなる。そこに水があれば，池や川を作ることができる。そして，泥ができ，泥団子づくりや泥投げに発展することもある。丈夫な木があれば，登ることができる。廃材やロープ，工具があれば，小屋や基地を作ったり，遊具を作ったりすることもできる。火があれば，火をつけること自体が面白いのだが，料理をしたり，鍛冶屋遊びをしたり，火を囲んで話をしたりすることができる。完成品でない素材があることで，用意した場所で用意した遊具を大人が考える通りに使うだけのときには考えられないほど，子どもの遊びのイメージは次々と広がっていく。そうした素材や道工具を多く置いている。

こうした場を実現するためには，大人が場を作り過ぎないことが必要だ。高い場所があれば，子どもはそこに登りたいと思う。ほどよい高さがあれば，そこから飛び降りてみたいと思う。くぐれる場所があれば，そこをくぐってみたいと思う。棒があれば，それを振り回してみたいと思う。そして，今までにやってみたことのないことを試してみたいと思う。子どもは，最初から決まっている結果から逆算して組み立てたプロセスを粛々と実行していくのではなく，その場の興味や関心，好奇心から「面白い」と思える限界までプロセスを「積み上げて」いくのである。そうして子どもは自分の限界に挑戦し，多くのことを実感しながら，自らの中に楽しさを蓄えて自ら成長していく。そして，新たな「面白そう」「やってみたい」という気持ちに向かっていく。

子どもの「生きる力」は，そうした積み上げのプロセスの結果として生まれてくるものだ。大人から見れば無駄に見えることや，ばからし

く見えることも多い。けれども，そのすべてが自分への満足につながっているということを見逃してはいけない。「いきいきとしたい」「面白いことをしてみたい」という気持ちから生まれる遊びは，子どもが生きることそのものにつながっている。

子どもの遊びのエネルギーを受け止めることができるような場を作るためには，そうした積み上げのプロセスをできる限り許容できる場を意識する必要がある。そして，大人の側に子どもの様々な興味や関心，好奇心を受け止める覚悟する必要がある。大人が用意した施設や場に用意したものが高価なものであったり，子どもが手を加えることが難しいものであったりするほど，子どもは大人の作った枠を超えてしまい，大人は子どもの行動を規制することが限りなく多くなる可能性がある。それは，大人の作ったものを大切にしない子どもが悪いのではなく，子どものそうした様々な興味や関心，好奇心を受け止めるには限界のある施設だということを大人は知らなければならない。遊び場のために子どもがいるわけではない。子どもが遊ぶために遊び場はある。この意識は，遊び場にいる大人にとって欠かせないものとなる。

自由ということ

子どもについて自由が語られるときには，必ず次のようなことが言われる。

「自由はわがままとは違う」

「自由は自分勝手とは違う」

「自由は野放図と違う」

こうした意見は，まったく間違いないのだが，遊び場での子どもは，遊びなれていないほど，このように言われることが多い。では，子どもはどのように「わがまま」「自分勝手」「野放図」とは違う「自由」を手にしていくの

だろうか。子どもは，大人以上に「体感」してものごとを感じていく存在だ。けれども，大人は自由について，「自由には責任が伴う」「自由にするなら義務を果たしてからにしなさい」といった言葉で伝えようとすればするほど，子どもとの気持ちがすれ違っていく。わがままや自分勝手や野放図を経験しない子どもが自由を手にすることはできない。

逆説的なことかもしれないが，自分の行動がわがままで自分勝手，野放図であることを体感するには，子どもがやってみたいことをまずは思い切りできるような場を作るのが一番の早道だ。そのプロセスで誰かを傷つけてしまうことがあるかもしれない。誰かに多大な迷惑がかかることがあるかもしれない。けれども，「自分のせいでそうなった」という経験のない子どもには，「自分のせいで誰かが傷ついたり，誰かに迷惑がかかったりする可能性がある」という想像力は生まれにくい。

その意味では，限度はあるとしても，誰かが傷ついたり，迷惑がかかったりすることは，子どもの成長に欠かせない機会になる。こうした機会は子ども同士の間で積み重ねられていくこともあるが，大人の役割は必ずしも未然にトラブルを防ぐことばかりがよいわけではなく，むしろ，子どもの行動にどう人として向き合えるかという「ことが起きてしまってからの対応」の方が重要になることが多いだろう。トラブルを未然に防ぐことに専念してしまうと，子どもの成長の機会を奪ってしまうことにもなる。

しかしながら，そのときの大人に必要とされるエネルギーは大変なものだ。けれども，その大人の存在をかけた価値観を通した子どもとのやりとりが子どもの成長につながり，大人と子どもとの信頼関係につながっていく可能性をもっている。このときに，その大人の価値観が子どもにとって納得の行くものでなければ，残念ながら大人と子どもの信頼関係は崩れていく可能性も見逃してはならない。

自由は，関係性の中にしか存在しない。人と人との関係の中で，自分がやりたいことをやることが許されるかどうかが決まってくる。このことを実感している子どもは，自分のやりたいことをやるために，自由の範囲を広げる

関係性づくりに動けるようになる。こうした子どもの実感には，年齢の差はないと言った方がよい。年齢に限らず，経験の幅とそこから実感があって初めて，子どもは納得して自ら行動を変えることになる。

そこでの子どもの遊びに関わる大人の役割は，元から大人の側にある答えを子どもに押し付けていくのではなく，まずは子どもが自由を手にして成長していく場を確保できるような関係性を地域と結ぶことにあり，大切なのは，結論よりも，その結論に達していく丁寧なプロセスにある。

今でも，遊び場に対して「危ない」「汚い」「うるさい」「悪い子どもが集まっているのではないか」という声は後を絶たない。冒険遊び場のように，火や水，工具などを使い，子どもが様々な遊び方をするようになれば，周辺住民にかかる可能性のある迷惑の度合いは大きい。地域の声を取り入れながら，思い切り遊べる子どもの場に理解を求めていくことが，より自由な関係性を持つ遊び場につながっていく。「子どもにとって大切なことなのだから」という正論をかざしているだけでは，遊び場での子どもの自由を保障することはできない。同時に，子どもの遊び相手になっているだけでは子どもの成長につながる「自由」を遊び場では広げていくことはできない。大人として多くの大人とつながっていくこと，伝えることが，自由を広げていくことには欠かせない。

自分の責任で自由に遊ぶ

日本国内の多くの冒険遊び場では，「自分の責任で自由に遊ぶ」というモットーが掲げられている。これは，子どもが思い切り遊ぶためには「事故は自分の責任」という考え方でいかないと，禁止事項ばかりが多くなってしまうという危機感から生まれた言葉だ。このモットーを表示した看板には，子どもの何かをやってみたいという気持ちを禁止してしまう前に，まずは

やってみられることを大切にしたいという思いがこめられ，羽根木プレーパークが開園してから２年目に作られた。

このモットーは，誤解を受けやすい要素も持っているが，「子どもがけがをしても手当ても面倒も見ない」「遊び場の安全点検は一切しない」「本当に危険な状況があったとしても，子どものやりたいことを止めない」ということとは違うということを説明しておかなければならない。冒険遊び場では，遊び場の安全点検やそれぞれの場面での状況判断，応急手当や事故後の対応をていねいに行うように考えている。そして，そのための話し合いやトレーニングが行われている。それは，多くの子どもがやってみたいことを試すことができるような場を保障し続け，地域の信頼を受け続けるための大人としての責任だ。

また，地域の多くの大人に見守ってもらえるような遊び場を作ることは，間接的に事故を未然に防ぐことにつながっている。そして，子どもが思い切り遊ぶ中で経験値を上げていくことで，小さいけがを繰り返しながら子ども同士で事故を防ぐ関係性が遊び場の中にできあがっていくことは見逃せない。

イラクで民間人が捕虜になって以来，「自己責任」という言葉がよく使われるようになり，誰かのした失敗を他人が責める否定的な含みを持っている。けれども，この言葉の使い方には気をつけなければならない。「自分の責任で自由に遊ぶ」というモットーが持つ自己責任は，けがをした子どもに遊び場側が自己責任を「とらせる」というのではない。自己責任は，決して他人のせいにはしないということを自らが感じることにある。子どもにとって，責任というのは「取らされる」ものではなく，「感じる」ものだ。

そして，「本当にやりたいことをやっているとき」という条件はつくが，子どもは自分のしたことを他人のせいにはしない。そうした感情が成長していくことは，人としての成長に重要な役割を果たす。そのためにも，やってみたいことがまずはできる遊

び場が大切ということだ。

より自由な遊びの場づくりのために

自由に子どもが遊べる場を作るために多くの人たちが様々なところで動いているが，現状は多くの点で厳しい。「もし何かあったら，誰が責任を取る？」という管理責任の問題から，社会全般で子どもの遊びが規制されていく傾向は今に始まったことではない。一方で，ストレスを抱え，生きている様々な側面で人と関わり合う実感を持たない子どもが自殺やいじめ，暴力，ドラッグなど反社会的・非社会的行動に走る傾向は顕著になってきている。

冒険遊び場で実施されたワークショップでは，面白い場所と危険な場所は多くの場合に重なっていることが示されている。つまり，危険な場所を取り除くことに専念してしまうことで，子どもが面白いと思える場所もすべて取り除くことにつながってしまう可能性を持っている。冒頭に紹介したデンマークにある「エンドラップ廃材遊び場」の初代プレーリーダーであるジョン・ベルテルセンは，次のように述べている。

> 私の仕事は遊びの中の創造的要素を活用する能力を育てる指導者ということである。この抑圧的な現代社会の中ですべての子どもに緊急に必要な精神的な安全弁として作用しながら，子どもの成長を助けることである。遊びのための適切な機会と状況があると，子どもたちはハッと驚かされるような才能を示し，幸福感を漂わせるものである。そして，いわゆる「扱いにくい子ども」の場合には，自由な遊びをすることによって，その問題の多くが解決されることは疑いないことである。

私たちは，最低限の安全管理を学び，子どもの心と体の成長のためにバランスを取れた遊び環境作りのために多くの大人が動かなければならない時代を迎えている。けれども，「子どもは放っておいても遊ぶのだから，大人が関わる必要はない」という考え方から前に進まない傾向は依然と強い。大人が子どもと遊んであげる必要ないということは確かだが，子どもが本来持つ自ら遊び，成長する力を発揮できる場や機会が少なくなっていることに対し

て，積極的に働きかける大人が社会的により重要な存在になってきている。

そして，そのような子どもと気持ちのすれちがわない関係を日常の中で作っていこうとする大人が，社会的に不可欠な存在になってきている。遊びを通して子どもと関わる大人は，学校・幼稚園・保育園・児童館・学童保育・校庭開放・少年鑑別所など子どもと関わるあらゆる様々な教育機関・福祉機関と同様に，「子どもと大人のすれ違わない関係」「子どもと大人の信頼関係」をつむぎ直す最先端の場にいるということが忘れられてはならない。

そのためには，子どもと関わりつづける覚悟を持ち，専従として関わる職員の配置も欠かせない。子どもは年齢に関係なく，人間関係や自分自身に対しての悩みを持ち，揺れながら育つ存在だ。その精神状態は，それぞれの遊び自体にも如実に現れてくる。日常的に開園している遊びの場であれば，そうした場面に出会うことは多い。

学校などとはちがい，遊び場という場所は，年齢，学区などを超えて子どもが集まり，それぞれが生活する中での「揺れ」と付き合っていくことになる。その子どもの揺れを感じ，そこに寄り添おうとする姿勢を持つ大人を配置しようとすれば，その大人は自然と開園しているときには確実にいることが必要になってくる。遊び場というのは，学校など他の施設と同様，その根底には，子どもが生きていることを支える場であるという視点が欠かせない。

その一方で，残念ながら，数多くの行政が切迫した財政状況の中で指定管理者制度（行政の事業を民間に委託できる制度）の導入が進められつつあり，学校以外の多くの場面での人件費の削減が進められている。川崎市を例に取れば，児童館としての「子ども文化センター」は市内に約50館を数えるが，この数年で，全職員が常勤から非常勤へとなっている。各行政ごとの財政事情とのバランスにもよるが，長時間の開園を非常勤，パート，アルバイトで埋めていこうという体制は，子どもの成長に寄与する成果を低くするだけでなく，継続的な地域住民との関係性を薄くし，子どもとの関係を悪化させていく可能性をより秘めている。

しかしながら，今の子どもを取り囲む問題に対して求められているのは，

場の維持管理だけに終わらない，子どもと関わる力のある大人だが，そうした大人の存在はその場に関わる若者たち，ボランティアの学びにも結びついている。初心者はトレーニングによって知識や考え方は学ぶことができるが，トレーニングだけでは人を育てることはできない。子どもと関わるときの人としての感性や価値観から生まれる姿勢や実際の動きは，子どもとのやり取りの中で体得していくことでしか得られないからだ。目の前の具体的な事柄に対してどのように動くかは，力のある実践者とともに動き，考え，振り返ることから得られる学びは，座学では得られない「大人として子どもと関わるための実感」を蓄える貴重な機会だ。

おわりに

子どもには，自ら遊ぶ力があり，自ら育つ力を持っています。子どもは，自ら危険を回避する能力を育てることが可能で，自らトラブルや困難を解決し乗り越えていく能力を育てることが可能で，つらい時には自らを癒し，友と出会い，新しい興味を持って新しい世界に出会い，生きていく力を自ら育てる能力を持っているのです。まずはそうした子どもの力を信頼することができるかどうかだと思うのですが，社会がこの事実を認め，受け入れるならば，大人が子どもの遊びに関わる一番の理由は，子どもがそうした力を自分自身で発揮できるように援助すること以外にはないでしょう。そのとき，大人は子どもと関わることで，本当に子どもの力になっているかどうかを考えてみなければならないのだと思います。

講演会の中で，みなさんにいくつかの問いかけをしました。もう覚えている人はいないかもしれませんが，みなさんの中にも様々な感性があると思います。そうすれば，子どもと関わっているときに，必ず様々な問いかけを自分で立てることができるでしょう。まずは常識を疑ってみてください。当たり前と思われている価値観を疑ってください。本当にそうだろうか。自分が関わっている目の前の子どもは，そうした常識や価値観でくくってしまってはいけないのではないか，と。そして，目の前の子どもに自分が最も力にな

れるためにはどうしたらいいのかを考え続けてください。私も，そのような姿勢で子どもと関わり続けたいと思っています。この仕事を始めて，ある人に「振り返ることができない人間は，子どもに関わる資格はない」と言われたことがあります。振り返ることができることで，子どもを感じるアンテナが自分の中に育っていくのです。

「子どもと遊んであげる大人は必要ない」と書きました。矛盾に聞こえるかもしれませんが，遊びを通して子どもと関わることに興味を持ったならば，子どもととことん遊んでみてください。子どものやってみたいことにとことん付き合ってみてください。大人でも多くの時間を一緒に過ごしたり，話し合いをしたりして初めて，互いのことが見えてくるはずです。子どもの気持ちに共感するためには，「遊び」を共有することが早道になるはずです。

みなさんと，またどこかでお会いできることを楽しみにしています。